韓国語の述語の構造

麗澤大学　　梅田博之

1．はじめに

本日は、第四回小出記念日本語教育研究会にお招きに預かり、ありがとうございました。まことに光栄に存じます。このような新進気鋭の方々のお集まりの場で、私などが果たしてお話しをする資格などあるだろうかと思いなやんでいる中に、とうとうその当日になってしまいました。

さて、小出先生のことは、すでに1967年の夏に第27回国際東洋学者会議がミシガン大学で開かれました時に、小出先生がいらっしゃってお目にかかったのが確か最初だったと思います。その後、いろいろとご指導を賜り今日に至っておりますが、いまも言語学会等のいろいろな学会でいつもお元気なお姿にお目にかかり、先生の学問的情熱には唯尊敬するばかりでございます。これからも先生にはご健康に留意されて、ますますお元気で我々後進をお導きくださいますよう、この場をお借りしてお願いを申しあげます。

また、ご当地、姫路にはもうお一人、私としてはお世話になった方がおられます。山田幸宏先生でございまして、先生は東京外大のアジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究員を永年勤められ、私どもの仕事に協力してくださった方ですが、私にとりましてはそんなことよりも、始めて韓国語と日本語の発音に関する対照研究をなさった方として忘れることのできない大先輩であります。その後、先生の学問的ご関心がイトバヤテン語をはじめとするフィリピン諸言語に移られたので、日韓対照研究の大先達を失ったわけでありますが、世が世ならばわたくしなど大きな顔をしてここでお話など出来なかったのでございます。

さて、私は韓国語を専門とするものでございますが、一方韓国人にたいする日本語教育に関する問題にも関心を持っております。大学では言語学を勉強しまして、研究対象として韓国語を選んだわけですが、1970年代から韓国で日本語教育が盛んになり、日本語学科をおく大学が増えてきまして、国際交流基金が韓国に

始めて日本語教師を派遣するということになりまして、外務省 OB の故森田芳夫氏と私が参りました。その当時は、まだ韓国国内では日本語・日本文化の積極的な導入には反対の声も多ございまして、「玄界灘にはまだ深い溝がある。この溝を掘ったのは我々ではない。この溝をそのままにしておいて何の日本語・日本文化の受け入れか」という意見も識者の中にはありました。この意見を書いた方は実はソウル大学の李基文先生で私の親しくしていただいていた先生でしたから、それだけ大きなショックを受けました。そういう状況の中で、言語の研究に携わる私としては、「溝」を埋める責任を、日本人に対する韓国語の教育・普及と、韓国人の日本語学習に役立つ日韓対照研究をすることで果たし、その上で韓国の日本語教育の支援をおこなって行こうと思ったわけであります。能力の不足は如何ともしがたいのですが、とにかく努力をいたしております。昨今、国会の反省決議が社会で話題になっておりますが、韓国をはじめとするアジアの諸国での日本語教育に携わる場合には、こういうことをやはり念頭においておく必要もあろうかと思います。

2． 韓国・中国の韓国・朝鮮語話者に対する日本語教育

さて、韓国における日本語教育が非常に盛んで、大学・高校のほか、巷の学院や社内教育等、いろいろな場で日本語教育が行われ、日本語学習人口が非常に多いことはすでによく知られているが、同じ Korean Language を母語とする人々が住む中国吉林省延辺朝鮮族自治州においても日本語教育が熱心に行われていることを見落としてはいけないと思う。中国に居住する朝鮮族は200万を数えるが、そのうち82万人が延辺に住んでいる。彼らは自分たちの母語を朝鮮語と呼んでいる。延辺朝鮮族自治州には朝鮮族の大学として延吉市に延辺大学があり、その外語系（外国語学部）に日本語科がある。学生定員は1学年30名で、朝鮮族の先生12名、日本人教師2名で指導に当たっている。延辺では、中等教育課程である初級中学（中学に当たる）・高級中学（高校に当たる）が、朝鮮族の学校と漢族の学校に分かれていて（ただし、どちらの学校を選ぶかは個人に任されているから、朝鮮族の子弟が漢族学校に通う例もある）、外国語科目として漢族学校は英語、朝鮮族学校は日本語を学習する。勿論、中等教育段階での外国語としては英、日、露、独、スペイン語が認められていて大学入試に出題されるが、延辺では現状として

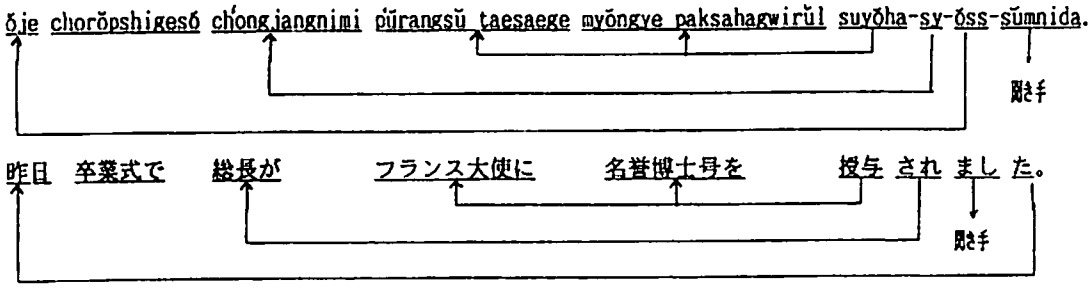
は上述のような状況である。中等教育段階では外国語を毎日1時間学習する。中等段階でこのように学習した人々がさらに大学に進学するのであるから、大学段階でのレベルはかなり高いものとなる。中国の日本語学習人口はかなり多いが、その中には朝鮮語話者がかなり含まれていること、そして中国には朝鮮族以外にも多くの少数民族がいて日本語学習人口に入っていることも考えられるから、母語別教育を考える立場からは中国人学習者の母語をもう少し吟味してきめ細かく対応する必要があるだろうと思う。

3．日本語と韓国語に共通な特徴としての述語の重要性

日本語、韓国語、そしてアルタイ諸語に共通な言語構造上の類似点として、よく挙げられる特徴の中に、主語が述語の先に立つ、修飾語が被修飾語の前に立つ、補語や目的語がそれを支配する動詞に先立つ、などの特徴がある。これを一言で言えば、「語は、話線の方向に規定され、重要な語または単位は常に後に位し、それを規定するものは、常にそれに先行してそれに従属する」（河野六郎1989）ということになる。述語は語幹に接辞や語尾などのいろいろな要素が付いて成り立っている。そして、それぞれの要素は述語より前の文の構成成分とそれぞれ呼応関係にある。いわば、文は、述語とそれより前の成分とに大きく分けることができ、述語より前の成分は述語を構成する諸成分と鏡像的な呼応関係にあるということができる（別表1）。

[別表1]

述語の構成成分と述語より前の文の構成成分との呼応関係



日本語についてのこの考えは、すでに北原（1970）に見ることができる。しかも、述語より前の成分は文脈上明らかな場合は省略する事が出来る。この意味で、日本語や韓国語、アルタイ諸語では、文の構成上、述語が占める比重が大きいと

いうのである。即ち、「述語が文の最後に位置して文の要めとなる」（前掲論文）のである。以下、韓国語の述語の構造を日本語のそれと比べながら考え、かつ韓国語の述語を形成する文法形式の特徴についてご説明したい。韓国語話者に対する日本語教育の場で何か参考にしていただけたらと思う。

4．韓国語と日本語の述語構造

韓国語は、いわゆる「膠着的言語」のひとつで、述語は語幹に３種類の接辞が付き、さらにそれに語尾が付くという構造である（VP I）。語幹にある種の接続形語尾がついた形に補助動詞が続き、その補助動詞に上と同じように接辞や語尾が付くような補助動詞構造（VP II）や、語幹にある種の連体形語尾が付いた形に形式名詞＋指定詞などから成る助動詞連語構造（VP III）もあるが、いずれも語幹に次々にいろいろな要素がそれぞれあまり融合することなく、それぞれの形を維持したまま接尾していくという点で、日本語とよく似ている。

韓国語の場合、述語に成り得るものは、動詞、形容詞、存在詞、指定詞である。これらは一括して「用言」と呼ばれる。

日本語においては、動詞と形容詞はそれぞれ異なった活用（語形替変）をする。その他に、形容動詞（わたくしは一応、「名詞形容詞」と呼んでいる）というものもあって、また別の活用をする。といういように、それぞれはっきり区別がある。ところが、韓国語の場合は、極くわずかな違いはあるが、上の４つの用言はほとんど同じ活用をする。しかも、ふつう形容詞とされるものが場合によっては動詞に付く語尾が付いて動詞的意味を表すことがある。たとえば、形容詞とされる nŭj-「おそい」に動詞語尾が付いて nŭj-nŭn-taとすると「おそくなる、おくれる」という動詞的意味を表すことになる。kŭ-ta「大きい」も manhi kŏss-ta というと「大きくなった、育った」という意味になる。それ故、この点に注目して、韓国語には形容詞がないとか、動詞と形容詞の区別がないと主張する人もいる。とにかく、活用がほぼ同じで、同じ語幹が静的な意味を表す場合と動的な意味を表す場合があるという点は日本語と非常に異なる。

存在詞というのは日本語にはない、韓国語独特の品詞分類である。存在・非存在を表す用言は、日本語でもアル・イルは動詞、ナイ・イナイは形容詞と錯綜しているが、韓国語の iss-ta「ある・いる」、ŏps-ta「ない・いない」もそれに劣

らず形態的特徴が複雑である。すなわち、終止・平叙形は時制の規定を行わない、形容詞に付く語尾を取って iss-ta, ŏps-ta という。日本語は存在する場合にはそこになにがしかの動作性を認めて動詞で表すのに対し、非存在は何の動作性も認めず静的な状態ということで形容詞で表すようだが、韓国語は存在・非存在を一応静的なものと捉えるわけである。しかし、韓国語においても chom tŏ iss-nŭn-daeyo「もうしばらくいるんですって」のような場合にはそこに動作性を認めて動作の持続態を表す nŭn が入り得る。一方、連体形は、動詞と同じように、動作の持続態を示す nŭn という語尾が付き（iss-nŭn,ŏps-nŭn）、時制表示を行わない語尾 ŭn が付くと過去の意味になる（iss-ŭn,ŏps-ŭn 但し、これは書き言葉でのみ使われる）。しかし、iss- の尊敬語形である kesi-「いらっしゃる」は後者の ŭn が付いて kesin となるが、過去の意味にはならない。このように、存在を表す用言は形態的特徴が動詞・形容詞の双方にまたがる形で特有の性質を示している。且つ、これは日本語も同様であるが、存在の主語を与格助詞で表す文型上の違いもあって、存在詞というひとつの品詞が用言の下位分類として立てられる。

指定詞は名詞に付いてそれを用言化する機能をもつもので、日本語のデアル、ダにあたる。日本語が存在を表すアルとという動詞を使って、ガアルといえば存在、デアルといえば指定の意味を表すのに対し、韓国語では上にも見たように存在は別の形式で表す。韓国語の指定詞は、i- という非常に短い形であって、o で始まる語尾・接辞が来れば半母音化し、母音語根の後ではしばしば脱落する。だから、韓国語の指定詞は名詞語根に付いてそれを用言化する形式と見なすことができる。韓国語では、漢語名詞を用言化する場合に、たとえば 指導hada「指導する」、有名hada「有名だ」のように ha- を付ける。この ha- は本来「する」という意味であるが、漢語が動的な意味をもつ場合には動詞を作り、静的な意味をもつ場合には形容詞を作るのである。だから、日本語学習の初期課程でよく「有名だ」を「有名する」と言う誤用を生じる。日本語で、前者の場合はスルを付けて動詞とし、後者の場合はダを付けて形容動詞とするのとは異なる。ha- はこの場合、漢語名詞を用言化する形成要素と見なすことができる。ところで、健康的、民主的など的が付いている漢語は ha- ではなく i- 、つまり指定詞が付くことによって用言化される。この場合は、日本語の形容動詞みたいになるが、指定詞が

用言形成要素として働いている。

5．韓国語の述語の構造

韓国語の述語は、別表3で示したように、その核となる用言語幹(v)に、接辞（３種類あり、その接合順序に従って s_1, s_2, s_3 で表す）、語尾(e) がついて完成するのが基本構造である(I)。ここでは接辞と語尾を区別する。接辞は語幹について全体が一種の延長語幹を作るような働きをする、接辞が付いただけでは自立形式に成り得ず、後に語尾が接合してはじめて発話可能な形となる。なお、接辞は見かけの上で何も付いていない場合もあり得る。たとえば、s_1 の -ŭsi- が付けば尊敬語形だが、付かなければ普通形となるとか、 s_2 の -ŏss- が過去形、-ŏssŏss- が大過去形であるのに対し何も付かないと非過去形であるというように。しかし、s_1 にしろ s_2 にしろ何も付かないということ自体がひとつの意味を持っているわけだし、特にs_2 についていえば下称形（聞き手に対し敬意表現をしない形）の語尾が接合する場合には非過去形の表示として -nŭn-/-n- という形式が現れるという事実もあり、s に関しては積極的にゼロ接辞を立てた方が一貫して説明できる。

上述の基本的な構造のほかに、語幹に特定の語尾が接尾したものに更に補助動詞(ac)(II)、助動詞連語(aux)(III)が続く構造もある。

[別表2]

I. v-s_1-s_2-s_3-e: po-sy-ŏss-kess-jyo「ご覧になったことでしょう」

II. v-e+ac-s_1-s_2-s_3-e:po-go sip-ŭsy-ŏss-kess-kunyo「ご覧になりたかったことでしょう」

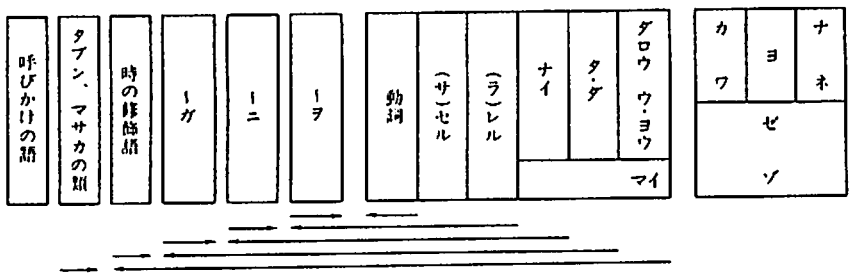
III. v-s_1-s_2-e+aux-e:po-sy-ŏss-ŭr kŏs-ipnida「ご覧になったはずです」

述語の、このような構造の枠組みは日本語においても全く同じように捉えられる。南不二男（1993）では、日本語の述語の重層的構造を論じ（別表3)、同じような例が韓国語などにも見られると述べている。ただ、日本語では述語の後にワ、カ、ノ；ヨ；ナ、ネなどの話者の気持ちや聞き手への働きかけを表す、いわゆる終助詞が付きうるが、韓国語にはそれに該当する形式はほとんどなく、豊富な終

止語尾で対応している。

この中、Ⅰ がもっとも基本的な構造であるので、この構造の枠組みに入る諸形式（すなわち、接辞と語尾）を具体的に比べると次のようになる。韓国語については別表4、日本語については別表3を参照。

[別表3]（南不二男(1993) p.52「階層についての諸説」の図8から一部分引用）



[別表4]

	s_1	s_2	s_3	e
V	0 （普通） ūsi（尊敬）	0* （非過去） ŏss （過去） ŏssŏss(大過去)	0 （非意思） kess （意思）	sŭpnita/pnita（上称陳述） ŏyo（略待丁寧） ta （下称陳述）など （待遇法と叙法）

* 下称語尾が付く場合は nūn/n と交替する。

即ち、枠組みは同じだが、そこに入り込む諸形式はかなり違う。日本語では使役・受け身つまり態（ヴォイス）の表示を接辞で行うが、韓国語では態の接辞は極く限られた特定の語幹にしか付かないので、語彙的接辞として s とは別に取り扱う方がよい。尊敬が接辞で表示されるのは同じであるが、可能・否定・希望は韓国語では補助動詞によって表す。

以下、韓国語の述語構造の枠組みの一々に入る諸形式についてご説明する。

敬語

語幹にまず接合するのが敬語接辞である。ここで、話者は発話に当たって、尊敬語形にするか普通形にするかを選択しなければならない。

韓国語の敬語は、文の素材に対する敬意表現と聞き手に対する敬意表現に分けられる。辻村敏樹先生の用語を借りれば「素材敬語」と「対者敬語」の区別である。敬語をこのように直截的に分けることが出来るかという考え（南不二男(1987)など）もあり、日本語の場合はそれなりに理由もあると思うが、韓国語では一

義的にはこの分け方が必要だと思う。素材敬語、すなわち文中の人物に対する敬意表現はこの接辞、つまり -usi- を選ぶことによって表される。韓国語の敬語が、日本語のように身内かどうかによって敬語を使ったり使わなかったりすることがない、いわゆる絶対敬語だということは留学生たちの敬語の誤用などからもわかる周知の事実だが、目上の人の前で、その人よりは低い目上の人について話をするとき、後者の人にたいする敬語を控えめにするという、いわゆる「圧尊法」の習慣も存在する。なお、絶対敬語であるといっても、場面が敬語の使用に影響を与えるという現象も認められる。たとえば、「A先生が校長先生に本をあげた」という文を他の先生の前でいう場合と友達の前で言う場合とでは敬語使用に若干の違いがあることが社会言語学的調査によって分かっている（荻野綱男他1991参照）。すなわち、この文では主格助詞、与格助詞、述語（tŭri-sy-ŏss-ta「おさしあげになった」， cu-sy-ŏss-ta「おやりになった」,tŭry-ŏss-ta「さしあげた」等）に敬語もしくは謙譲形式の使用が期待されるが、友達に話した場合には先生に話した場合より敬語使用の度合いが明らかに少なくなる。これは、敬語の使用が場面によって影響を蒙ることを意味し、敬語使用が場面によって影響を蒙らない敬語使用法を絶対敬語と呼ぶならば、韓国語の敬語は絶対的性格が強いが相対敬語的性格も少し持っているということができる。これに対して日本語の場合は同じ調査において、完全に場面の影響を受け、相手が友達の場合はほとんど敬語が使われない。この事実から、日本語では素材敬語は完全に対者敬語化していると言うことが出来、この意味で、先程の素材敬語と対者敬語は分けられないという意見は、日本語に関しては納得のいくものであるが、韓国語についてはそうでもないということになる。

なお、韓国語では尊敬語と謙譲語の共存が可能である（上掲の tŭri-sy-ŏss-ta がその例である）。これに対して日本語では「おさしあげになる」は使いにくい。もっとも、この共存は動作主を低めながら高めるという矛盾を話者に与えるものだから韓国語でも実際はそんなに多く使われることはない。

時制

敬語接辞に続くのが時制接辞である。韓国語では、時制は非過去形と過去形の別があり、過去形はさらに過去形と大過去形の区別がある。

非過去形は、ゼロ接辞によって示される。ただし、下称語尾が付くときには明

示的に nŭn/n によって示される。過去形は、接辞 -ŏss- の付加、大過去形は -ŏssŏss- の付加によって示される。

非過去形は日本語の未完了形に比定されるが、異なる点も少なくない。非過去形の用法は伊藤英人（1989）によると概略次のようである。1）未来：未来の特定の時間を示す副詞（onŭr cŏnyŏk「今晩」など）、限定された回数を示す副詞（ibŏne「今度」など）、未来での一定の条件（piga omyŏn「雨が降れば」など）、tŭrrim ŏpsi「間違いなく」等の陳述副詞が付くのが　普通。動詞はかなり自由に制限なく、未来の意味に使える。おそらく日本語と同じ、2）現在：かなり自由に現在進行の意味を表すことができる。-ko iss-ta と置 き換え可能。この現在進行の用法は日本語にはない用法として注意を要する、　3）そうなることが確実である事柄：いわゆる一般的真理や決まり・規則など。日本語と同じ。4）詠嘆的なもの：tto pone「また見てる」（日本語と同じ）、5）反問：過去の事柄に関しての反問を非過去形の疑問形でいう。wae namŭi irŭmŭr ssŏ?「なんでひとの名前を書いたのよ」（日本語と違う）、　6）聞き返し：過去の事柄について述べられたことを聞き返す。cugŏsstanmarya. ... cugŏyo?「死んだんだよ。...死んだ？」(日本語と違う）、　7）命令・勧誘（日本語と同じ）　等々である。

こうして、韓国語の非過去形の用法を見ると、韓国語には現在進行の用法と、過去の事柄についての反問・聞き返しの用法などが、日本語の未完了形と違う。

過去形に、普通の過去形と大過去形の区別がある点も日本語とは異なるところである。韓国語では、過去のある時点でその行動が行われ今はもう終わってその結果も残っていないと捉えるか、過去のある時点で行われた行動の結果が現在もなお残っていると認めるかによって、表現形式が異なる。たとえば、「行く」という動詞を例にとれば、yŏnbyŏne kass-ta「延辺に行った（普通過去形）」は戻って来たかどうかは問題としない。今もそこに居る場合もあり得るのに対して、yŏnbyŏne kassŏss-ta と言うと「延辺に行ったのだった（大過去形）」ということで、今はもうそこに居ないことを意味する。

結局、この二つの過去時制の違いは、前者が過去のある時点で行われた行動をその始発点に注目して表し、後者は過去の行動をその終点に注目して表すものと言うことが出来る。ただ、この区別は日本人が韓国語を習う場合の問題点であって、日本語教育にはあまり問題にならないかも知れない。

態度や働きかけを表している。話し言葉では、さらに -kunyo「詠嘆」、-neyo「意外性のある詠嘆」、-nundeyo,-undeyo「婉曲」、-ciyo 「話し手の判断に対する聞き手の同意を期待」など、話し手の気持、または聞き手に対する態度などを表す専用の語尾もあり（これらの語尾は、待遇法としては略待形しかない）、いずれにしても、韓国語の終結語尾は聞き手に対する話し手の態度の表明の機能をもっぱら担っている点が日本語と比べて特徴的である。つまり、韓国語は、命題などを終結語尾で包んで、それを種々の場面等に適切に対応尾しながら聞き手に送信する形を取っていて非常にわかりやすい構造である。

韓国語の述語は、上述の基本構造のほかに、補助動詞を伴った構造や、連体形＋形式名詞を含む構造（助動詞連語構造と呼ぶ）など、より複雑な構造もある。補助動詞構造は、アスペクト・推移・終結・動作恩恵の授受・試み・放置・定位・強め・願望などを表し、助動詞連語構造は、「筈だ」「らしい」「できる」「のだ」「のだった」「否定」などの意味を表す。いずれも、日本語の補助動詞構造や「何々するのだ、のようだ、するらしい」などの表現形式と枠組みがよく似ていて、日韓両言語で並行的に捉えることができる。ただ、その中に入る諸形式の用法等はかなり異なっているので、語学教育の上で周到な注意が必要である。

このようにして述語形式が完成した後、日本語ではいわゆる終助詞がさらに接合し、話者の聞き手に対する態度・働きかけ等が示される。たとえば、「よ」「な」「ね」「ぜ」「ぞ」などである。これに対して韓国語には終助詞にあたるような形式がなく、上述の終止語尾などで対応している。

以上、韓国語の述語の構造について概略ご説明した。南不二男氏は上で見たような韓国語の文の述語の構造に、日本語と同じような階層的構造が見られることを指摘している（南不二男1993）。南氏の文の構造を階層的な性格のものとしてとらえるという考え方はきわめて興味深く、かつ説得力がある。今後、このような観点から韓国語の述語構造・文構造を考えていきたい。

参 考 文 献

伊藤英人（1989）「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』第131輯　天理　朝鮮学会　pp.(1)～(44)

梅田博之（1991）『スタンダードハングル講座 2 文法・語彙』東京　大修館書店

荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松（1991）「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』第141輯　天理　朝鮮学会　pp.(1)～(42)

北原保雄（1970）「助動詞の相互承接についての構文論的考察」『国語学』第83輯　東京　国語学会　pp. 32～59

河野六郎（1955）「朝鮮語」『世界言語概説 下巻』（市川三喜・服部四郎共編）東京　研究社　pp.357～439

――― （1993）「日本語の特質」『言語学大辞典 2 世界言語編（中）』（亀井孝・河野六郎・千野栄一編）東京　三省堂　PP.1574～1588

野間秀樹（1988）「<hagessta>の研究 ― 現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって ― 」『朝鮮学報』第129輯　天理　朝鮮学会　pp.(1)～(73)

――― （1990）「<harkosida>の研究 ― 再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって ― 」前掲誌　第134輯　天理　朝鮮学会　pp.(1)～(64)

南不二男（1987）『敬語』東京　岩波書店

――― （1993）『現代日本語文法の輪郭』東京　大修館書店